

2025年7月6日 説教「サマリヤを通して」

ヨハネの福音書4章1～14節

本日は日本長老教会の世界宣教週間ですから、ルカの福音書の学びはお休みにして、ヨハネの福音書4章から、世界宣教について御言葉を学んでいきたいと思えます。

1. ユダヤからサマリヤへ (1～4節)

①イエスの働きが知られ (1)「**イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマをさずけていることが、パリサイ人の耳に入った。それを主が知られたとき、**

ヨハネは悔い改めを説き、バプテスマを受けました。一方、イエス・キリストが宣教を始められると、ヨハネ以上に多くの人々が信仰を持つようになりました。また、イエスはバプテスマも授けておられたとあります。それらが、パリサイ人の耳に入ったことは、イエスご自身も知るに至りました。

②主はユダヤを去り (2～3)「**—イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであったが—主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。」**

ところで、イエスがバプテスマを授けておられたと1節に記されていますが、2節には注意書きがあります。つまり、イエスのご自身でバプテスマを授けていたのではなく、弟子達がそれを行っていたというのです。3:22、26にある記事も弟子達が授けていたのかと類推できます。しばらくの間、イエスはエルサレムに来ていましたが、ここではパリサイ人と、あえて対決することはせず、北のガリラヤ地域へと向かわれたのでした。

③サマリヤに (4)「**しかし、サマリヤを通して行かなければならなかった。」**

ユダヤからガリラヤに最短距離で行こうとすると、サマリヤを通過しなければなりません。しかし、ユダヤ人は普通その道ではなく、ヨルダン川沿いの道を使っていました。というのも、700年余り前に、アッシリア帝国が侵攻してユダヤ人は捕囚され、他民族がサマリヤの地域に入ってきたのです。その結果、その地域はユダヤ人から見ると、雑婚となり、宗教的にも偶像礼拝が広がっていたので、両者はつきあっていなかったのです。

2. サマリヤの女に水を所望されたイエス (5～9節)

①スカルの井戸のかたわらに (5～6)「**それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は第六時ごろであった。」**

さて、イエスがサマリヤの地に入って、立ち寄ったのはスカルという町でした。そこは創世記の時代にヤコブがヨセフに与えたシケムという町の近くにありました。ここに町ができたのは、ヤコブの井戸があったからです。イエスは疲れを覚えられて、その井戸の傍らに腰をおろされたのです。時は第六時(昼の12時)でした。

②女が水をくみに (7～8)「**ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエ**

スは『わたしに水を飲ませてください』と言われた。弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。」

そこに一人のサマリヤの女が水を汲みに来たのです。喉が渇いていたイエスは、ためらいなく女に水を所望されました。同行の弟子達は食物を調達するために、町に行っていたのです。井戸は町の端にあったのでしょ

- ③ユダヤ人なのに (9)「そこで、そのサマリヤの女は言った。『あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。』—ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである。—」

この女からすれば、付き合いのなかったユダヤ人のイエスから声をかけられた事は意外であり驚きでした。そこで、彼女はなぜサマリヤ人の自分に飲み水を求められたかと、理由を尋ねたのです。それが彼女の率直な気持ちでありました。

3. 渇くことのない水 (10~14 節)

- ①生ける水を (10)「イエスは答えて言われた。『もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。』」

ここに、イエスの伝道は既に始まっていました。もう一つの水について語り出していたのです。つまり、イエスはもう一つの水が神の賜物であって、その水は水を所望したご本人から与えられるということを述べられたのです。女と話している相手が、生ける水を与える主であることを知ったなら、女の方でその水を所望することになるでしょうと、イエスは言われたのです。

- ②この井戸は深いのです (11~12)「彼女は言った。『先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです。』」

彼女は少し混乱していました。井戸にある飲み水のことを考えていたからです。「水を下さると言っても、この井戸は深いのですよ、汲む道具も持たずにどうしてそれができるのでしょうか。」「ヤコブとその子たち、家畜たちもこの井戸から飲んだと言いますが、あなたはヤコブよりも偉い方なのですか。」

- ③渇くことがない水 (13~14)「イエスは答えて言われた。『この水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわきでます。』」

するとイエスは生ける水について説明されます。つまり、飲み水は飲めばやがて渇くが、生ける水を飲む者は渇くことなく、その人のうちで泉となった永遠のいのちを与える水なのということです。そして、それを与えるのはイエスご自身であると言われたのです。

《結論》今朝の聖書箇所を、世界宣教の視点から考えていきましょう。

たまに、海外宣教はどうして必要なのですか。国内宣教が進んでいないのに海外への宣教にエネルギーを向けるのは順序が違うのではありませんかといったご意見を聞きます。しかし、今朝の聖書箇所にはそれについての答えが記されています。

第一に、そこに外国があるということです。

つまり、イエス・キリストが進まれた道を進むと、そこにはサマリヤがありました。サマリヤはユダヤとガリラヤといったユダヤ人が住む地域とは異なり、人種、文化、宗教的にも異なる人々が済む外国でした。それでは、イエス・キリストはそこを避けて通られたでしょうか。いいえ、イエスはユダヤ人達と交際のないサマリヤの地域に大胆に入って行かれました。今日の世界でも国境をいつの間にか越えてしまっていたという所があるでしょう。この国は、外国は海を越えた向こうにあるという土地柄ですから、海外への宣教というと、非常に緊張するのです。海外を強く意識し、よく祈って臨むという面では良いのですが、罅を越えても進んでいくという面ではつい怖気好きがちです。進んで行く先が外国であるなら、そこでの宣教を主イエスにならって行っていきたいのです。「あなたがたは行ってすべての国民を弟子としなさい」(マタイ 28:20)というお言葉を覚えて祈っていきましょう。

第二に、救いを必要としている人に国境はないということです。

イエスが足を踏まれた外国ともいえるサマリヤ。そこにあったヤコブの井戸の近くで休んでいる時に、一人の女の人がやってきました。彼女は複雑な背景を持つ人でしたが、ここでイエス・キリストに出会わせていただきました。彼女はユダヤ人、サマリヤ人という違いにこだわっていましたが、イエスはそんなことは全く気にかけず、すぐにこの女性の救いのために、お言葉をかけられました。それも、飲む水をきっかけに、生けるいのちの水を教えられました。それを飲めば渇くことがないのです(6:35 参照)。彼女は本当の水のことを言われて、戸惑いました。イエスが示される救いの道は、世が目指している道とは平行線です。しかし、生ける水が必要としている人に、国境はありません。この女性がそうであるように、あなたも私たちの周りの人々も同じです。生ける水、救いを必要としています。既に救われている方は、家族、友人のために祈りましょう。すぐにできる世界宣教です。

第三に、日本長老教会の関係の宣教師とその宣教のことです。

今回の「海外宣教報」を見て、名前が見当たらないと思われた兄姉もいることでしょう。その一人は、宣教地から追放されました。健康を害された方もありました。世界宣教には困難が伴います。一方で、長老教会教師として初めて宣教師として働き始められた福田真理夫妻もいらっしゃいます。メルボルンの日本語教会でご奉仕されています。その子息もロンドン在住の日本人のために労しています。将来を目指している方々もいます。国境を越えて働くことを主から導かれた方々のため、祈りささげていきましょう。世界宣教の一端である姉ヶ崎教会の宣教のためにも祈りましょう。